〈報　告〉

基礎看護学実習Ⅰにおける学生の学び
―実習アンケートの分析から―

澁谷 恵子[1)]，三上 智子[2)]，根本 和加子[1)]，村上 正和[1)]
千葉 安代[3)]，小林 美子[1)]，畑瀬 智恵美[1)]，坂田 三允[1)]

Learning experience of nursing students in Basic Nursing Practicum I
― analysis of a student survey ―

Keiko SHIBUYA，Tomoko MIKAMI，Wakako NEMOTO，Masakazu MURAKAMI
Yasuyo CHIBA，Yoshiko KOBAYASHI，Chiemi HATASE，Miyoshi SAKATA

[1)]名寄市立大学保健福祉学部看護学科，[2)]札幌市立大学看護学部看護学科，
[3)]名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科

In order to better understand what students learn and perceive, and the sense of achievement they gain from Basic Nursing Practicum I, a yearly study is conducted in the form of a self-reported questionnaire of nursing students after completion of this course. This paper looks at results from the past two years.

Although there were differences in course achievement levels between the two years, through their experience of interacting with patients,students were able to achieve the goal of “motivation to learn more about nursing”. Students found satisfaction in experiential learning in a clinical situation, which reinforced their interest in nursing and nurses, and strengthened their motivation to learn.

The results of the present study suggest as follows:

1) All teachers should share student’s state of the basic nursing practicum Ⅰ, and use it to next stages of various education.

2) In order to improve the effectiveness of nursing practice, it is necessary to give students more guidance about the rules of group work and their individual roles, and to assess group work tasks.

3) Efforts should be made to reduce initial disparities in individual performance due to in experience.

4) It is important to provide enough support so that students have a successful first experience in nursing practice.

基礎看護学実習Ⅰにおける学生の学びや気づき、達成感などを把握するために実習終了後にアンケート調査を行っており、2年間の調査から以下のような結果を得た。実習到達度には年度差がみられたが、患者とかかわる体験を通して「看護への学びを深めていく動機づけとなる」目的は達成されていた。実習に対する満足感は看護あるいは看護師に対する関心を強化し、学習への動機づけを促進していた。今後の課題として①基礎看護学実習Ⅰでの学生の状況を教員が共有し、次の段階の教育に生かすことができるようにすること②演習の効果を向上させるために、グループワークのルールや役割についての指導を行い、グループワークの作業過程を評価すること③初めて行う看護体験の個人差を少なくすること④体験が成功体験となるような支援の必要性が示唆された。

Key words: Basic nursing practicum、clinical setting, motivation

Ⅰ. 緒言

基礎看護学においては、基礎看護学実習を基礎看護学実習Ⅰ（1年次、1単位. 45時間、後期）、基礎看護学

実習Ⅱ(2年次、2単位.90時間)の二期に分け実施している。 基礎看護学実習Ⅰは看護学生として初めて医療の現場に出向き看護師をモデルにしつつ、コミュニケーションや療養生活を送る対象者の日常生活とその人的・物理的環境について考え、より良い療養環境と看護について考察することを目的した初めての実習で（表1)、 2つの地方自治体立病院9病棟において行われる。基礎看護学実習の成果としては、看護への動機付け[1)]や看護観の芽生え[2)]、学習意欲の効果[3)] 等がすでに報告がされているが、本研究では、2年間が経過した基礎看護学実習Ⅰの学生の学びを明らかにし、今後の示唆を得ること事を目的とした。

表1　基礎看護学実習Ⅰ目的.目標.方法

位置づけ	看護学生としてはじめて対象者と関わる体験を通して,看護学の学習を深めていく動機付けとなることを期待した臨地実習である。
目的	医療機関で療養生活を送る対象者との場の共有やコミュニケーションにより,療養生活を送る対象者の日常生活とその人的・物理的環境について考察し,より良い療養環境と看護について考察する。
目標	1）入院患者の療養環境について理解する。 2）患者の入院生活の過ごし方について知り,健康時の日常生活との相違や困難さについて理解する。 3）入院患者との人間関係を形成するためのコミュニケーションについて考えられる。 4）安全・安楽・自立(自律)・個別性に配慮した看護援助の実際について考えられる。
方法	1.実習病院の特性や看護部の方針等についてオリエンテーションを受ける。 2.対象は基本的に成人期および老年期にある方。 3.指導者・担当教員や看護師からの説明や共に看護場面の見学・参加等を通し、対象との直接的な体験を中心に学ぶ。 4.学内において,お互いの体験や学びを共有する。(最終日に学内演習) 5.臨床の場における学習体験を基盤に文献学習等も含め,対象（患者）にとってより良い療養環境や看護について考察しレポートする。

Ⅱ.研究方法

1.対象者：基礎看護学実習Ⅰを履修した平成18年度生50名及び19年度生54名の看護学科１年生計104名を対象とした。

2.データ収集方法：アンケートは実習オリエンテーション時に配布し、無記名で実習終了3日後に回収した。

3.実習アンケート内容：質問項目―実習目標の到達度、実習の主体的参加、学内演習参加、実習満足については5段階法、実習の主体的参加、学内演習参加、実習満足についての理由を自由記述にて回答を得た。

4.分析方法：提出されたアンケート質問項目―実習目標の到達度、実習への主体的参加、学内演習参加、実習満足については統計ソフトSPSS16.0　for　Windowsを用いMann-WhitneyのU検定を実施し、実習への主体的参加、学内演習参加、実習満足についての理由は、記述された1文を1コードとし複数の研究者でBerelson、B.の内容分析の手法を用いてカテゴリー化を行った。

5.倫理的配慮:アンケート提出は自由意志であり拒否及び中断によりなんら被害はこうむらず成績にも一切関係ないこと、個人の匿名性を確保しプライバシーの保持に十分配慮すること、実習教育改善や研究以外の目的では使用せず、終了時後に速やかにデータを破棄することについて文書と口答で説明しアンケート提出をもって承諾とした。

Ⅲ.研究結果

アンケートは、対象学生104名に配布した。回収率は100名(96%)であった。内訳は平成18年度生46名92%、19年度生54名100%である。

実習への主体的参加、学内演習参加、実習満足についての理由の内容分析結果は、カテゴリー【　】サブカテゴリー《　》　コード数(　)で記述する。

1.実習目標到達度

『入院患者の療養環境について理解できたか』については、良く理解できたと回答した学生は18年度生26名(56.5%)19年度22名(40.7%)、少し理解できたは18年度生20名(43.5%)19年度31名(57.4%)であった。『患者の入院生活の過ごし方について知り、健康時の日常生活との相違や困難さについて考えられたか』について、18年度生はよく理解できた30名(80.4%)が最も多く、次いで少し理解できた16名(34.8%)であった。19年度生は少し理解できた33名(61.1%)が最も多く、よく理解できたは19名(35.2%)のみで、よく理解できたと回答した学生が少なかっ

た。『入院患者との人間関係を形成するためのコミュニケーションについて考えられたか』をみると、18年度生はよく理解できたとした学生が37名(80.4%)、少し理解できたが7名(15.2%)であり、19年度生は「よく理解できた」とした学生が30名(55.6%)、「少し理解できた」23名(42.6%)であった。『安全・安楽・自立(自律)・個別性に配慮した看護援助の実際について考えられたか』は18年度生では良く理解できたと回答した学生が20名(43.5%)、少し理解できた23名(50.0%)であったが、19年度生は少し理解できた31名(57.4%)が最も多く、良く理解できたと回答した学生は20名(37.0%)で少なかった。どちらともいえないは18年度1名(2.2%)に対して19年度は3名(5.6%)であった。また、実習目標到達度アンケート項目に関する年度間比較において、Mann-WhitneyのU検定を行った結果、入院生活の理解とコミュニケーションに有意差がみられた(表2)。

表 2 実習目標到達度の年度比較

値は人数(%)

		良く理解できた	少し理解できた	どちらとも言えない	あまり理解できなかった	全く理解できなかった	P値
療養環境の理解	H18(n=46)	26(56.5)	20(43.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
	H19(n=54)	22(40.7)	31(57.4)	1(1.9)	0(0.0)	0(0.0)	n. s.
入院生活の理解	H18(n=46)	30(65.2)	16(34.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
	H19(n=54)	19(35.2)	33(61.1)	2(3.7)	0(0.0)	0(0.0)	0.002
コミュニケーション	H18(n=46)	37(80.4)	7(15.2)	1(2.2)	1(2.2)	0(0.0)	
	H19(n=54)	30(55.6)	23(42..6)	0(0.0)	1(1.8)	0(0.0)	0.014
看護援助の実際	H18(n=46)	20(43.5)	23(50.0)	1(2.2)	2(4.3)	0(0.0)	
	H19(n=54)	20(37.0)	20(37.0)	3(5.6)	0(0.0)	0(0.0)	n. s.

Mann-Whitney の U 検定　　n. s. :有意差なし

2.実習への主体的参加

18年度生で主体的に参加できたと回答したのは23名(50.0%)、次いで少し主体的に参加できた20名(43.5%)であった。19年度生は少し主体的に参加できたとの回答が32名(59.3%)と最も多かったが、主体的に参加できなかったと回答した学生が14名(25.9%)、どちらともいえないと回答した学生も8名(14.8%)みられた。実習への主体的参加の程度についての年度比較はMann-WhitneyのU検定で有意差がみられた(表3)。

表3 実習への主体的参加の程度

値は人数(%)

	主体的に参加できた	少し主体的に参加できた	どちらとも言えない	あまり主体的に参加できなかった	全く主体的に参加できなかった	P値
H18(n=46)	23(50.0)	20(43.5)	2(4.3)	1(2.2)	0(0.0)	
H19(n=54)	14(25.9)	32(59.3)	8(14.8)	0(0.0)	0(0.0)	0.012

Mann-Whitney のU検定

主体的に参加した理由として最も多かったのは、18年度生は【積極的実習参加(16)】《積極的に疑問解決の実行(8)》《自己課題達成への積極的行動(2)》《積極的な行動の実行(2)》《積極的に自己の思い・願いの表明(2)》《自己課題を認識して参加(2)》が(表4)、19年度生は【積極的実習参加(10)】《積極的に疑問解決の実行(6)》《積極的な行動の実行(3)》《自己課題達成への積極的行動(1)》であった(表5)。

少し主体的に参加した理由として最も多かったのは、18年度生は【消極的実習姿勢(7)】、次いで【自己学習不足(4)】【コミュニケーションに対する消極性(2)】【集中力欠如(1)】【意図的な質問不足(1)】【知識不足(1)】の否定的な理由と、肯定的な【 積極的実習姿勢(5)】【主体的実習姿勢(2)】であった(表6)。

表 4 実習に主体的に参加できたと回答した理由(H18)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
積極的実習参加(16)	積極的に疑問解決の実行	8
	自己課題達成への積極的行動	2
	積極的な行動の実行	2
	積極的に自己の思い・願いの表明	2
	自己課題を認識して参加	2
意欲的な実習姿勢(3)	意欲的な実習参加	1
	自分の言いたい事を全て表明した	1
	自からができる範囲の看護実践	1
主体的な実習姿勢(1)	自から患者とかかわる	1
指導方法(1)	学生が考えながら行動する指導	1

19年度生も【消極的実習姿勢(12)】《消極的実習姿勢（行動化）(10)》《消極的実習姿勢(要望)(1)》《消極的実習姿勢(発言)(1)》が最も多く、次いで【コミュニケーション能力不足(6)】【情報収集能力(3)】、【学習不足(1)】、【行動のスピード不足(1)】の否定的理由と、【積極的実習姿勢(9)】【積極的実習姿勢への変化(3)】【 コミュニケーションに対する積極性(2)】【実習成果(1)】と【指導方法(1)】の肯定的理由であった(表7)。

実習参加の程度がどちらともいえない理由は、18年度生は【知識不足(2)】19年度生は【消極的実習姿勢(4)】【学習不足(1)】【コミュニケーションに対する消極性(1)】であった(表8、9)。

表5 実習に主体的に参加できた理由(H19 n=54)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
積極的実習参加(10)	積極的に疑問解決の実行	6
	積極的な行動の実行	3
	自己課題達成への積極的行動	1
主体的な実習姿勢(2)	自からができる範囲の看護実践	1
	自から患者と関わる	1
希望の実現(1)	自己の希望の実現	1
思考の拡がり(1)	実践とそのことからの思考の広がり	1
指導方法(1)	指導者の行動化促進の指導	1

表 6 実習に少し主体的に参加できた理由(H18 n＝46)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
消極的実習姿勢（7）	消極的実習姿勢（行動化不足）	6
	消極的実習姿勢(知識不足)	1
自己学習不足（4）	自分から調べようとする姿勢の不足	1
	自己学習の不足	1
	体験したいことや質問したいことの準備不足	1
	事前学習不足に伴う質問不足	1
コミュニケーションに対する消極性（2）	コミュニケーション場面が主体的に参加できない	1
	患者とのコミュニケーションに努力した	1
集中力欠如（1）	失敗の心理的影響に伴う集中力欠如	1
意図的な質問不足(1)	意図的な質問を指導者さんにするべきだった	1
知識不足（1）	知識不足	1
積極的実習姿勢（5）	積極的に疑問解決の実行	5
主体的実習姿勢（2）	不明な点の学習の実施	2

表 7 実習に少し主体的に参加できたた理由(H19)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
消極的実習姿勢(12)	消極的実習姿勢(行動化)	10
	消極的実習姿勢(要望)	1
	消極的実習姿勢(発言)	1
情報収集能力(3)	情報収集能力不足	2
	主体的情報収集	1
コミュニケーション能力不足（6）	自ら話を始めることが出来なく黙りこんでしまうことがあった	1
	患者さんと上手にコミュニケーションが取れない	2
	患者さんとコミュニケーションがとりにくい	1
	コミュニケーションが難しい	1
	自分の意見が伝えられない	1
学習不足(1)	自己学習が足りなかったと思う所もあった	1
行動スピード不足(1)	行動化が遅かった	1
積極的実習姿勢への変化（3）	3 日目から、すぐに周りの看護師に聞いて行動した	1
	3日目から自分らしく実習できた	1
	最終日には積極的に行動できた	1
積極的実習姿勢(9)	自分が実践できることは積極的に行なった	1
	積極的にケアを体験した	2
	積極的に疑問解決の実行	3
	積極的な行動	3
コミュニケーションに対する積極性（2）	自主体的に患者さんにたくさん話しかけた	1
	患者さんと積極的に話し合う	1
実習成果(1)	説明を参考に体験を深く考えた	1
指導方法(1)	指導者さんに怒られた日から積極的行動に変化した	1

表 8 実習参加がどちらともいえないと回答した理由(H18)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
知識不足(2)	知識不足に伴う消極的行動	1
	知識不足に伴う理解不足	1

表 9 実習参加がどちらともいえないと回答した理由(H19)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
消極的実習姿勢(4)	自分から発言がない	1
	主体的に実習できたとは言えない	1
	どう実習での行動がよく分からなかった	1
	忙しそうだったので質問できなかった	1
学習不足(1)	学習不足	1
コミュニケーションに対する消極性（1）	患者や看護師に話しかけることに少し躊躇	1

3.演習参加

演習参加程度については、18年度生は少しできたが22名(47.8%)、十分出来た19名(41.3%)であったが、19年度生は十分出来た25名(46.3%)、少し出来た18名(33.3%)であった。どちらともいえないは18年度生3名(6.5%)であったが、19年度生は10名(18.5%)と多かった。演習に十分参加した理由は、18年度生は【話合い(11)】が最も多く、他に【参加姿勢(2)】【他者の体験(3)】【自己の実習体験(1)】【貢献(1)】【実習環境(1)】【時間管理(1)】であった(表10)。19年度生の十分参加した理由も18年度同様に【話し合い(13)】が最も多く、次いで【自己の実習体験の表出(6)】【他者の実習体験(6)】【プレゼンテーション(3)】【参加姿勢(3)】であった(表11)。

表 10 演習参加の程度 十分出来た理由(H18)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
話し合い(11)	自分の意見も述べ話し合いに参加した	3
	自分の経験を十分伝えられた	2
	自分が意見を言えた	1
	時間が足りないほど積極的に話し合った	1
	他者の意見も聞きつつ意見も発表できた	1
	自分の意見をもちつつメンバーの話しにも耳を傾けた	1
	話し合いの過程に貢献した	1
	自分の意見を述べた	1
参加姿勢(2)	積極的に意見を出し発表準備にも力を入れた	1
	学んだことを協力してまとめた	1
他者の体験(3)	他者の体験が興味深かった	1
	他者との意見交換で見方を広げた	1
	他者の体験が聞けた	1
自己の実習体験(1)	自分の体験を話せた	1
貢献(1)	演習の過程に貢献した	1
実習環境(1)	実習環境の違いによる内容の違いに興味	1
時間管理(1)	時間が不足で充分貢献できなかった	1

表 11 演習参加の程度 十分出来た理由(H19)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
話し合い(13)	積極的に話し合いに参加した	6
	互いの意見を積極的に交換できた	4
	進んで積極的に話せた	2
	様々の意見が聞け勉強になった	1
自己の実習体験の表出(6)	自分の体験・意見を積極的に提出した	5
	自分の体験・考えの表現が出来た	1
他者の実習体験(6)	自分と違う他者の体験が役立った	4
	他者の体験を聞け充実した話し合い	1
	他者の体験が刺激になった	1
プレゼテーション(3)	メンバーの体験をわかりやすくプレゼンテーションできた	3
参加姿勢(3)	発表の時に質問する事ができなかった	1
	協力し合った	1
	一所懸命頑張った	1

少し参加できた理由で最も多かったのは、18年度生は【 話し合い(13)】で、その他7コードの否定的理由と6コードの肯定的理由で構成されていた(表12)。19年度生の理由で最も多かったのは【プレゼテーション(5)】であり、他に4コードの否定的理由と1コードの肯定的理由が抽出された(表13)。

表 12　演習参加の程度　少し出来た理由(H18)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
話し合い（13）	うまく自分の意見が言えなかった	2
	自分の失敗体験のため他者の体験を冷静に聞けなかった	1
	話し合いでの積極性が不十分だった	1
	同じ意見ばかり発言して効果的ではなかったかもしれない	1
	おしゃべりが多すぎた	1
	まとめる段階で発言をしなかった	1
	話し合いが出来た	1
	自分の学びを伝えられた	1
	話し合いの場で伝えたい事を言えた	1
	思ったことは伝えられた	1
	積極的に発言した	1
	他の病棟の話しを聞き,実りある話し合いができた	1
時間管理（3）	時間が不足で演習過程に貢献できなかった	1
	時間不足で全部を話せなかった	1
	演習の進めかに問題があった	1
発表準備（2）	資料の準備が遅れ効果的な発表とはいかない部分もあった	1
	資料作りがあまり上手くいかなかった	1
言語化（2）	自分の意見をまとめられないこともあった	1
	実習で感じたことを自分の言葉で表現できた	1
参加姿勢（1）	積極的に参加しようとは考えていた	1
発表内容（1）	発表意見に差異がなかった	1

表13 演習参加の程度　少し出来た理由(H19)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
プレゼテーション（5）	話し合いは積極的に行ったが、上手く発表できなかった	1
	皆に伝わりやすい発表方法をもっと工夫するべきであった	1
	意見をまとめることや発表方法もあまり考えられなかった	1
	発表であわててしまった	1
	自分の実習経験が発表の資料に役立った	1
意見調整（4）	メンバーの意見をまとめることが難しかった	1
	自分の意思と他者の話しとを組み合わせてまとめることが上手にできなかった	1
	話し合いには参加したが、まとめがうまくできなかった	1
	意見調整が不十分だった	1
参加姿勢（1）	積極的に演習に参加できた	1
時間不足（1）	話し合いたい事が多くて少し時間が足りなかった	1
課題の困難性（1）	課題が難しかった	1

4.実習満足

十分満足と回答した学生は、18年度生28(60.9%)19年度生33(61.1%)と両年度ともに最も多く、次いで少し満足が18年度生14(30.4%)、19年度生16(29.6%)である。両年度生共に、どちらともいえない及び少し不満足と回答した学生は10%前後みられた(表14)。十分満足した理由として、18、19年度生共に臨床の場での学習成果を最も多く挙げていた。18年度生はその他に【充実感(5)】【学習の動機づけ(4)】【看護師への関心習成果を最も多く挙げていた。18年度生はその他に【充実感(5)】【学習の動機づけ(4)】【看護師への関心 (3)】【自己課題達成(3)】【自分自身について(2)】という理由を挙げ、満足しながらも【レポート課題達成不足(2)】を感じ【実習の方法の要望(2)】がみられた。19年度度生ではその他に【 充実感（８）】【看護や看護師への関心（５）】【学習への動機づけ（４）】【指導方法（２）】【実習事前準備（１）】【実習参加姿勢（１）】【看護方法の違い（１）】【実習時期（１）】がみられた(表15、16)。

表 14　実習満足について

		十分満足	少し満足	どちらともいえない	少し不満足	全く不満足
満足の程度	H18(n＝46)	28(60.9%)	14(30.4%)	3(6.5%)	1(2.2%)	0
	H19(n＝54)	33(61.1%)	16(29.6%)	2(3.7%)	3(5.6%)	0

少し満足と回答した18年度生の理由は【実践可能な内容不足(3)】【失敗体験(3)】【学習の動機づけ(3)】【コミュニケーション能力(1)】【実習時期(1)】【事前学習不足(1)】【疲労に伴う学習不足(1)】【自己課題の未達成(1)】【昨年度生との比較(1)】が抽出され、サブカテゴリーには何らかの課題や反省が述べられていた。【充実感(1)】という肯定的な理由も1コードみられた。19年度生は【 技術力不足(5)】【臨床の場での学習成果(4) 】【実習経験内容の少なさ(2)】【事前準備不足(2)】【実習参加姿勢(2)】【看護師志望への疑問(2)】【実習期間不足(1)】【知識不足(1)】が抽出され、18年度生には見られなかった技術力不足が課題とし

てあげられ、他に【臨床の場での学習成果(4)】【 看護・看護師への関心(1)】という肯定的理由も5コードみられた。どちらともいえない理由は、18年度生は【知識不足(2)】【実習目標の喪失(1)】、19年度生は【経験内容の少なさ(2)】【反省 (1)】であった(表19、20)。

少し不満足の理由は、18年度生は【実習の時期(1)】のみ、19年度生【実習期間 (2)】【実践の心理的拒否(1)】【看護師を好きになれない思い(1)】の4コードであった。

表 15 実習ー十分満足と回答した理由(H18)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
臨床の場での学習成果(16)	授業だけでは十分に理解できなかったことを理解できた	3
	実習中に様々な気づきや学びがあった	3
	臨床の場を具体的に知る事ができた	2
	講義で学習したことを現場で確認できた	1
	現場でしかわからないことを学べた	1
	自分の目で見ることで理解できるものがたくさんあった	1
	経験することで様々なことを気づき、非常に貴重な体験になった	1
	コミュニケーションの困難さや看護師の仕事を大まかに理解できた	1
	今まで知らなかった新しい知識がたくさん学べた	1
	病院内部の詳細な見学は成果があった	1
	実習を通して看護どういうものなのかわかることができた	1
充実感(5)	沢山の見学と丁寧な指導で充実した実習だった	2
	とても満足できる実習	1
	いままで気がつかなかったことや知らなかったことを知れた充実した実習	1
	全出席し沢山の学びをえたことを実感した	1
学習の動機づけ(4)	自己学習の大切さと看護師としての心がまえを知った	1
	看護の現場を一部知り、もっと看護について学びたい	1
	改めて勉強の必要性を痛感	1
	今後の学び方を学んだ	1
看護師への関心(3)	看護師になりたいと一層思った	2
	看護師や看護はスゴイ！と心底思えた	1
自己課題達成(3)	自己課題がクリアできた	2
	上手に実践できなかったが精一杯実習をできた	1
自分自身について(2)	自己の性格を変えることの受容	1
	自分の新たな一面を発見した	1
実習の方法の要望(2)	実習病棟以外の見学	1
	生活援助技術の進度を現在より早める	1
レポート課題達成不足(2)	レポート内容が唯一不満足	1
	レポート文章力不足	1

表 16 実習ー十分満足と回答した理由(H19)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
臨床の場での学習成果(19)	いろいろの体験を参考に考えが深められた	4
	病院のことを実際に知り、療養環境や看護について考えることができた	3
	実際に見て看護業務や環境、コミュニケーションを深く考えた理解が深まった	3
	教科書や学校で学ぶことの出来ないことを学べた	2
	看護業務や教科書に書いてあることについて体験し，理解が増した	2
	よく知らなかった臨床のことが知れた	1
	患者と接することで患者の気持ちを考えることができた	1
	患者さんと話し色々なことがわかった	1
	実際に患者とコミュニケーションがとれたことが何よりも嬉しかった	1
	看護師や患者様と実際にふれ合えた	1
充実感(8)	様々の発見や学びがあった	2
	多くのことを経験し，考えてとても充実していた	2
	色々な方々に支えられ、楽しく有意義な実習ができた	1
	知りたかったことを知ることができた	1
	これ以上を求めることは出来ない学分があった	1
	考えてた以上の事を学び.感じる事ができとても勉強になった	1
看護や看護師への関心(5)	患者さんの笑顔を見て看護師を目指す意欲が増した	1
	人と関われることが素敵な事だと実感した	1
	様々な体験と目指そうとする職業の良さを知れた	1
	看護師の仕事を選んで良かったと実感した	1
	看護にもっと興味を持てた	1
学習への動機づけ(4)	患者に触れ、看護者の仕事を近くで体験し、もっと勉強したいと思った	1
	勉強不足を痛感したが今後の学習に繋げられる実習だった	1
	体験してみて新たな課題や目標を見つけ、もっと頑張ろうという自己意識を高める事ができた	1
	未履修な事も経験でき、学習する意欲が湧いた	1
指導方法(2)	指導者の方が優しく質問しやすい雰囲気づくりをしてくださった	1
	疑問点をすぐ説明してくださった	1
実習事前準備(1)	ベッドメイキングをもっと練習しておけばさらに良い実習になったと思う	1
実習参加姿勢(1)	もっと多くのことが吸収できたのではないかという後悔	1
実習前履修内容の効果(1)	看護技術の学習が少し進行していたので、実際の病棟について普段段気づかないところも気づけた	1
看護方法の違い(1)	学内と臨床の看護方法の違いを気づいた	1
実習時期(1)	履修がもっと進行してから実習したいと思った	1

Ⅳ. 考察

1. 実習目標到達度

実習目標到達度アンケート項目の年度比較に関してMann-WhitneyのU検定を行った結果、入院生活の理解とコミュニケーションについては19年度生が有意に低下していた。これは、アンケート項目の『入院患者の療養環境の理解』に関連する実習評価項目（参考資料）である「患者の入院生活の過ごし方について知ることが出来る」「療養生活が患者の生活や習慣に及ぼす影響について考えることが出来る」「療養生活と健康時の生活との相違について考えることが出来る」に対する教員・指導者評価と「療養生活が患者の生活や習慣に及ぼす影響について考えることが出来る」に対する学生自己評価、また、アンケート項目の『コミュニケーションについて』に関連する評価項目である「患者―看護師関係形成のためのコミュニケーションについて考えることが出来る」に対する教員・指導者評価が18年度生に比較して19年度生が低かった結果とも一致するものであり、主観的な目標到達感と客観的な評価は関連することを示すものである。しかし、アンケートの内容分析から18年度生に比較して19年度生の評価が低い原因を特定できるようなものは見出せなかった。

18年度生の臨地実習の様子、実習場や学生の意見を参考に、19年度生には、基礎看護学実習Ⅰ科目責任者が担当する授業科目において、患者の環境を具体的に観察し環境整備に意図的に参加できることを目的とする演習等をより多く取り入れる等の授業方法を工夫した。しかし、19年度生のアンケート及び実習評価からは授業方法の工夫の効果は認められない。両年度の基礎実習前の授業科目や履修内容や実習環境に大きな変化はないことから、実習到達度の差は年度生の違いによるものと推測される。

基礎看護学実習Ⅰは看護基礎教育課程のスタートの実習である。学年進行とともに他領域の看護学実習を履修する教育計画を考えると、本実習での課題を次の段階の他領域の看護学実習の中で獲得できるように本実習における学生状況を他領域の教員と共有化することが、学生の成長に役立つと考える。

2. 実習への主体的参加

実習への主体的参加の程度は19年度生が有意に低下していた。関連する実習評価項目「実習課題を認識した学習姿勢がある」は、教員・指導者評価で18年度学生がA評価を多く獲得している。

主体的に参加した理由の内容分析で、18年度生の場合は【積極的実習参加】16コード【意欲的な実習姿勢】3コード【主体的な実習姿勢】1コードであったのに対して、19年度生は【積極的実習参加】10コード、【主体的な実習姿勢】2 コードであった。また、少し主体的に参加した理由は両年度共に【消極的実習姿勢】が最も多かった。これらの分析から、学生は実習（学習）にどのように自ら意欲的取り組んだかという実習に対する積極的な関与の程度を基に参加程度の判断を行っていることがわかる。浅野は学習に意欲的に取り組む「積極的関与」を強化する学習動機は「特定課題の志向」である[4] と述べる。看護学科の多くの学生は看護職を志望している。この看護職志望という「特定課題の志向」が実習という学習に意欲的に取り組む積極的関与を強化し、その結果、実習（学習）にどのように自ら意欲的に取り組んだかという実習参加姿勢を判断基準にしたものと考えられる。初めての臨床実習の体験を通して、看護職志望という「特定課題の志向」を強化するためには、実習開始前オリエンテーションや実践場面等で、実習（学習）に意欲的に取り組む「積極的関与」の意義や効果を学生に示唆する教育も必要といえる。

3. 演習参加

演習では、互いの体験や学びの話し合いを通し、より良い療養環境と看護について学んだことや今後の課題を明らかにする目的で、実習病院や病棟の違うメンバーでグループ学習及び発表を行っている。演習参加について十分と回答した学生は両年度共に最も多く、【話合い】【自己の実習体験の表出】【他者の実習体験】が理由の上位を占めている。18年度生は、少し参加できたとの理由にも話し合いが効果的に行われなかったという否定的理由を含む【話合い】を一番多くあげている。これらの結果から、初めての臨地実習直後の自己の体験を表出し、他者の体験からも学びあうような相互作用の活発な話し合いに積極的関与する程度が演習参加の判断に影響していると考えられる。D. L. ウルリッチらはグループ学習に対して、学生は積極的関与による理解の深まり、社会的な相互作用が強化、内省の促進、グループ内の相互依存性と責任の促進と

いう４つの肯定的意見と予習やワーク実施における多大な使用時間などの時間的な拘束、仲間の学習に対する憤慨、非効果的なグループメンバーへの不公平感という３つの否定的な意見を持つ[5] と述べるが、話し合いの活発さがグループ学習に対しての4つの肯定的理由を派生させ、演習に主体的に参加する状況を作り出したと考えられる。演習の学習効果を向上させるために、話し合いが活発かつ有意義に行われるように演習開始前にグループワークのルールや役割について指導する、演習後にピア評価を実施しグループワーク作業過程の評価を行うなどの取り組みも必要であると考える。

4. 実習満足

本実習は看護師の援助場面に接するとともに、指導を受けながら実際にいくつかの難易度の低い日常生活援助に取り組み初めて「看護」を経験するものである。

石綿は基礎看護学実習Ｉの実習効果として、看護のイメージ化、動機の強化、生活改善の意欲向上、自己の課題の明確化、学習意欲の向上[6] を報告しているが、本実習では、両年度生ともに60％の学生が十分満足したと回答しており、その理由として【臨床の場での学習成果】を最も多く、次いで【充実感】【看護師(看護)への関心】【学習の動機づけ】を挙げている。また少し満足とした学生の中には、【臨床の場での学習成果】や【技術力不足】の中で、患者と話す体験からコミュニケーションについても考察したものもいる。野村らは患者に対し漠然としたイメージしか抱いていなかった学生が、看護者の立場で初めて患者に接し日常生活の援助を行う過程から、情緒レベルであるが患者の理解を深め、コミュニケーションが看護に果たす役割について気づく[7] と述べるが、看護師とともに患者に何かを行う体験が、入学後の学習を内省する・技術力不足を気づかせるなどの機会を提供し【学習の動機づけ】を強化したものと考えられる。

一方、体験できないことが【実践可能な内容不足】という不満足感や、実際の体験の失敗が【失敗体験】という自己効力感の低下も発生させている。実習満足の理由からも、体験的な学びをさせること、体験内容の個人差を少なくすること、初めての看護実践が成功体験として学生に刻まれるような支援を行う必要性が示唆されたと考える。【充実感】には、学生が初めての臨床の場で喜びを感じて実習していたことを感じさせる内容が記述されている。高橋らが早期看護学実習Ｉの主観的満足感の調査から、「実習の楽しさ」を感じることが「看護を学ぶ意欲」を促進させ、学生達が主体的な学習者になるためには、彼らの内的動機づけを促進させる働きかけが極めて重要である[8] と述べるように、今後も学生が初めての実習で充実感(楽しさ)を感じられる働きかけや指導体制が必要である。

Ⅴ・結論

2年間の実習アンケートから、実習目標到達度に年度差がみられたが、 患者と関わる体験を通して「看護学の学習を深めていく動機付けとなる」目的は達成されていた。実習への主体的参加は実習に対する積極的な関与の程度を、演習参加は話し合いの活発さを判断基準にしていた。実習の満足は臨床の場での体験的学習によって得られ、体験的学習が看護あるいは看護師(看護)への関心を強化し、学習の動機づけを促進していた。

今後の課題としては、基礎看護学実習Ｉの学生状況を教員が共有し、次の段階の教育に生かすこと、演習の学習成果を向上させるためにグループワークのルールや役割について指導を行うこと、グループワーク作業過程を評価すること、 初めて行う看護体験内容の個人差を少なくすることや体験が成功体験となるような支援をすることの必要性が示唆された。看護教育基礎課程のスタートとしての基礎看護学実習Ｉが、学生にとって有意義な実習となるように課題を検討し改善していきたいと考える。

Ⅵ・文献

引用文献

1)野崎真奈美;『大学における基礎看護学臨地実習の実施時期とその内容』, 日本看護学教育学会誌, 第14巻, p. 221(2004年7月)

2) 野村志保子他;『基礎看護学実習Ⅰにおける学生の学び』, 順天堂医療短期大学紀要, 2巻, p. 1～16、(1991年3月)
3) 桜井礼子、山口真由美;『看護教育における初期体験実習の経験と意義』, 大分看護科学研究, 1(1)、p. 20～26(1999年12月)
4) 浅野志津子;『学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程―放送大学学生と一般大学学生を対象とした調査から―』, 教育心理学研究, 50巻、p. 141, (2002年6月)
5) D. L. ウルリッチ、K. J. グレントン/高島尚実訳 ;『看護教育におけるグループ学習のすすめ方』, p. 109～110, 医学書院(2002年8月)
6) 石綿啓子;『基礎看護学実習における学生の学び―実習効果に焦点を当てて―』, 高崎健康福祉大学紀要, 第4号, p. 125(2005年3月)

参考文献

1) 藤岡完治, 堀喜久子編集 ;『看護教育の方法』, 医学書院 (2003年3月)
2) 藤岡完治, 村島いさ子, 安酸史子;『学生とともに創る臨床実習指導ワークブック』, 医学書院 (1996年3月)
3) 石井くみ子, 菅沼真由美 ;『見学実習の対象. 看護の学びの検討―実習記録の分析から―』, 第31回日本看護学会論文集―看護教育, 第14巻, p. 12～14(2000年1月)
4) 石綿啓子;『基礎看護学実習における学生の学び―患者理解に焦点を当てて―』, 高崎健康福祉大学紀要, 第4号, p. 113～124(2005年3月)
5) 柿原加代子, 松田日登美, 原田真澄 ;『基礎看護学実習(見学実習)におけるレポートの記述内容の質的分析―環境の援助方法の記述内容の分析から―』, 日本赤十字愛知短期大学紀要, 第15号, p. 1～13 (2004年3月)
6) 野崎真奈美;『初めての臨床実習において看護学生が看護への動機づけを高めた条件』, 第30回日本看護学会論文集－看護教育, p. 45 (1999年月12月)
7) 杉森みど里 ;『看護教育学』, 医学書院 (1999年4月)

参考資料:看護学実習Ⅰにおける平成 18 年度と 19 年度の評価比較

		評価	A	B	C	D
入院患者の療養環境の特徴について把握できる	自己評価	H18 (n=52)	10(19.2%)	36(69.2%)	6(11.5%)	0
		H19 (n=54)	9(16.7%)	36(66.7%)	9(16.7%)	0
	指導者評価	H18	26(50%)	25(48.1%)	1(1.9%)	0
		H19	21(38.9%)	28(51.9%)	5(9.3%)	0
患者の入院生活の過ごし方について知ることが出来る	自己評価	H18	17(32.9%)	30(57.7%)	5(9.6%)	0
		H19	15(27.8%)	31(57.4%)	7(13%)	1(1.9%)
	指導者評価	H18	25(48.1)	27(51.9)	0	0 **
		H19	12(22.2%)	35(64.8%)	7(13.0%)	0
療養生活が患者の生活や習慣に及ぼす影響について考えることが出来る	自己評価	H18	14(26.9)	28(53.8%)	10(19.2%)	0 *
		H19	8(14.8%)	24(44.4%)	21(38.9%)	0
	指導者評価	H18	16(30.8%)	31(59.6%)	5(9.6%)	0 **
		H19	11(20.4%)	34(63.0%)	14(25.9%)	0
療養生活と健康時の生活との相違について考えることが出来る	自己評価	H18	22(42.3%)	21(40.4%)	8(15.4%)	0
		H19	15(27.8%)	27(50.0%)	11(20.4%)	1(1.9%)
	指導者評価	H18	19(36.5%)	28(53.8%)	5(9.6%)	0 *
		H19	11(20.4%)	30(55.6%)	13(24.1%)	0
行われている看護援助の目的が理解できる	自己評価	H18	11(21.2%)	28(53.8%)	12(23.1%)	1(1.9%)
		H19	2(3.7%)	44(81.5%)	8(14.8%)	0
	指導者評価	H18	7(13.5%)	38(73.1%)	7(13.5%)	0
		H19	8(14.8%)	31(57.4%)	13(24.1%)	2(3.7%)
行われている看護援助の安全性・安楽性について考えられる	自己評価	H18	14(26.9%)	29(55.8%)	8(15.4%)	0
		H19	8(14.8%)	36(66.7%)	10(18.5%)	0
	指導者評価	H18	16(30.8%)	35(67.3%)	1(1.9%)	0 **
		H19	9(16.7%)	33(61.1%)	11(20.4%)	1(1.9%)
患者―看護師関係形成のためのコミュニケーションについて考えることが出来る	自己評価	H18	21(40.1%)	23(44.2%)	7(13.5%)	1(1.9%)
		H19	21(38.9%)	23(42.6%)	9(16.7%)	1(1.9%)
	指導者評価	H18	29(55.8%)	20(38.5%)	3(5.8%)	0 **
		H19	18(33.3%)	26(48.1%)	10(18.5%)	0
医療の現場で学ぶ者としての節度ある態度や身だしなみである	自己評価	H18	14(26.9%)	27(51.9%)	9(17.3%)	2(3.8%)
		H19	25(46.3%)	22(40.7%)	7(13.0%)	0 *
	指導者評価	H18	28(53.8%)	17(32.7%)	7(13.5%)	0
		H19	41(75.9%)	9(16.7%)	4(7.4%)	0 *
関係者との連絡・相談・報告が出来る	自己評価	H18	13(25%)	20(38.5%)	17(32.7%)	2(3.8%)
		H19	10(18.5%)	30(55.6%)	12(22.2%)	2(3.7%)
	指導者評価	H18	25(48.1%)	24(46.2%)	3(5.8%)	0
		H19	27(50.0%)	22(40.7%)	5(9.3%)	0
実習課題を認識した学習姿勢がある	自己評価	H18	22(42.3%)	19(36.5%)	11(21.2%)	0
		H19	14(25.9%)	33(61.1%)	7(13.0%)	0
	指導者評価	H18	37(71.2%)	15(28.8%)	0	0 *
		H19	28(51.9%)	23(42.6%)	3(5.6%)	0
実習目的・目標に沿った内容のレポートが, 期限が守られ提出される	自己評価	H18	9(17.3%)	21(40.4%)	21(40.4%)	0
		H19	11(20.4%)	32(59.3)	10(18.5%)	1(1.9%)
	指導者評価	H18	24(46.2%)	22(42.3%)	6(11.5%)	0
		H19	18(33.3%)	30(55.6%)	4(7.4%)	2(3.7%)